





## 内容紹介

原発事故後、避難区域には多くの動物たちが残された。いとしい「家族」であつても、「人命優先」の状況で、ペットの保護は後手にまわった。残された動物たちの保護にやっと進みだした時も、福島県が管理するシェルターは人手も物資も足りず、衛生環境も悪かった。手遅れで不十分だった対応に翻弄された動物たちの「いのちの記録」は、重い教訓を残している。

## 初出

朝日新聞 二〇一三年三月二十六日～四月十二日

## 目 次

- [第1章 子犬を掲げて叫んだ](#)
- [第2章 「お父さんのバカ」](#)
- [第3章 ペットは後回しに](#)
- [第4章 80日ぶりに床の上で](#)
- [第5章 20キロ圏内うろつく犬](#)
- [第6章 こいつら心病んでる](#)
- [第7章 「犬も人も救われた」](#)
- [第8章 それでもまた行った](#)
- [第9章 猫の保護は後回し](#)
- [第10章 官民連携は終わった](#)
- [第11章 殺さなくなっっていい](#)
- [第12章 「ダメだ。白旗だ」](#)
- [第13章 花を供えて、わびた](#)
- [第14章 犬猫の幸せって何だ](#)
- [第15章 これ野良猫だよね？](#)
- [第16章 人を知らない猫たち](#)
- [第17章 いつ終わらせるのか](#)
- [第18章 教えてくれたこと](#)

## 第1章 子犬を掲げて叫んだ

助けられなかった命もある。しかし、目の前の命は俺が守った。

「うおおおお」

2011年3月19日。福島県富岡町の獣医師、渡辺正道（わたなべせいどう）（53）は自宅が立つ丘の上で泣いた。

手に持つのは生まれたばかりの子犬。町に向かって、子犬を掲げた。大きな声で、思いっきり叫んだ。

東電、見ろよ。こんな状況でも動物は生きてんだぞ。俺だって立ち上がって、必ず復興させるからな。

富岡町には福島第二原発があり、第一原発からも渡辺の自宅までは7キロしかない。渡辺は震災翌日の12日に避難し、家に戻ったのはこの日が1週間ぶりだった。

避難の際、すぐに戻れるだろうと愛犬と、動物病院で預かっていた犬猫計20匹を置いてきた。しかし原発事故は収まる気配がない。今にも爆発するのではと恐怖心はあったが、このままではみんな衰弱死する。危険は承知、考えた末の帰宅だった。

町に入り、名物の2千本の桜のトンネルを抜けた。角を曲がると小高い丘にぽつんとある動物病院と自宅が見える。ふだんは数百メートル手前でクラクションを鳴らすと、フレンチブルドッグのチェスターとポニョが喜んで出迎えてくれたものだった。

いつもより長めにクラクションを鳴らしながら、渡辺は思った。

「どうせもう死んでいる」

エサは多めにやったが、断水で水は用意できなかった。助かるまい。

と、庭の片隅で白と黒のかたまりがモコモコと動いた。紛れもなく、チェスターとポニョだ。

信じられない。2匹は半狂乱でほえている。衰弱した様子だが、ちぎれんばかりに尾を振って。

ポニョを見ると、身重だった腹がべったんこになっていた。産んだんだ。庭に入って辺りを探すと、いた。犬小屋と病院の壁のすき間に1匹の黒い子犬が横たわっていた。

どこから引っ張り出したのか、手袋の上に子犬はいた。まだ目はあいていない。ほとんど乳を飲めていないようで、体は冷たく、ひからびたようになっていた。あと1日遅れたら、確実に死んでいただろう。

もう1匹身ごもっていたのを以前エコーで確認していたが、どこを探しても見当たらなかった。カラスにでも食べられてしまったのか。

でも、一つの命は守った。



## 第2章 「お父さんのバカ」

原発の「げ」の字もなかった。

「今すぐ避難してください！」

2011年3月12日朝、防護服姿の警察官が、パトカーからしきりに呼びかけていた。

前夜、福島県富岡町の獣医師、渡辺正道は、妻や娘と車中で夜を明かした。大津波は川をさかのぼり、丘に立つ自宅前まで押し寄せていた。

政府は前夜、原子力緊急事態宣言を発令していたが、そんな情報は届いていない。大津波は収まったのに、今さら何から避難するんだろうと不思議に思った。

どうせすぐに戻る。替えの下着も持たずに避難しようとした。

「ポニョも連れて行こうよ」

中学3年の次女、怜菜（れいな）は身重の愛犬を連れて行きたがった。翌日には帝王切開での初産を控えていた。

「置いていく」

即断だった。

当時、渡辺の動物病院では17匹の犬猫を預かっていた。すべてを車に乗せることはできない。この子たちを置き去りにして自分の犬だけを同伴することは、獣医師としてできない選択だった。

「バカ、バカ。お父さんなんか死んじゃえ」。怜菜は泣きじゃくり、正道とは口をきかなくなった。

避難先の川内村でテレビを見て、初めて原発が事故を起こしたと知った。以後、一家は各地を転々とする。すぐに帰れるという予想は打ち碎かれた。

決死の覚悟で渡辺が1週間ぶりに戻った3月19日、病院のケージにいた17匹のうち犬猫5匹は、既に息絶えていた。高齢や病弱のため、持ちこたえられなかった。





その中には、渡辺が2月に脾臓（ひそう）摘出の手術を終えて預かっていたラブラドルもいた。術後の経過が良好だっただけに、飼い主に事実を伝えるのは気が重かった。

1人ずつ電話で連絡した。渡辺が避難したあと、入れ違いでペットを迎えに来て、巡り合えなかった人もいた。どの飼い主も正面切って渡辺をなじりはしなかった。だが、遠慮がちに「もう少し早く連れ出せなかったの？」と言う人もいた。

泣いてわびるしかなかった。

飼い主たちも全国に避難し、散り散りとなっている。生き残った犬や猫の面倒を見られるのは、もう自分しかない。

渡辺は、数回に分けて犬や猫を連れ出した。妻の実家がある三春町で納屋を借り、世話を続けることにした。

### 第3章 ペットは後回しに

福島県富岡町の獣医師、渡辺正道は避難者のペットが気になった。多くの避難者がいる郡山市の避難所を回り、顔なじみの飼い主と再会した。だがペットの姿はなかった。

「町のバスに乗る際、犬は置いていくように言われた」

「すぐに帰れると思ったから、水しか用意してやれなかった」

みんな、泣いていた。

ペットを連れてきた人もいた。避難所はペットの持ち込みは禁止。駐車場で寒さに震えながらひっそりと車中生活を送っていた。ペットも腹を下していたが、何より飼い主たちの疲れ切った様子が目についた。



「置いてきたのも、連れてきたのも生き地獄だな」

見かねた渡辺は声をかけ、三春町に借りた納屋でペットを預かることにした。宅配便も届かない中、大学の同窓生らが持参してくれた物資で何とかしのいだ。

それでも40匹近くの犬猫の面倒をみるのは限界がある。4月5日、福島市にある県獣医師会に足を運び、協力を求めたが、断られた。

「会員の安否を確認するだけで、手いっぱいなんですよ」

帰り道、20年来の付き合いのある福島市の開業獣医師・河又淳（かわまたじゅん）（53）を訪ね、ひとしきり愚痴った。

河又も3月下旬から市内最大の2400人が避難するあづま総合運動公園に通っていた。やはり車中生活を送る飼い主たちにペットフードを配り、ワクチンを打つボランティアをしていた。

飼い主の間には「ペットが見つかったら保健所に殺処分される」とのうわさが流れ、河又の申し出を「県のワナじゃないか」と思い込むほどにおびえていた。

確かに県の動きが見えない。避難所に駐在していた県職員に、ペットへの対応について尋ねた。

「人命が優先なんです。いまは動物の話などしないほしい」

渡辺と河又は、「これは長期戦になるな」と途方に暮れつつ、励まし合って別れた。

動物愛護を担う県食品生活衛生課は3月、混乱の極みにあった。

なにしろ担当分野が食品、水道から墓地・埋葬業務にまでわたっている。水道の復旧、火葬場の確保、食品からの放射性物質の検出……。さまざまな仕事が降りかかっていた。

動物愛護の担当職員2人も、避難所での感染症防止マニュアルの作成などに追われた。ペットへの対応は後回しになった。

## 第4章 80日ぶりに床の上で

福島県で動物救護本部ができたのは、震災から1カ月あまりがたった2011年4月15日だった。震災後10日前後で発足した宮城や岩手のように事前の協定がなく、組織間の調整に手間取った。

対照的だったのが、1万人規模の避難者を受け入れた新潟県だ。

中越、中越沖と2度の地震で得た経験を生かし、新潟は震災後1週間で動物救済本部を設置した。全30市町村でペットの受け入れ態勢を整え、避難所では犬や猫と一緒に過ごすことができた。

5月に入ると、福島県食品生活衛生課にはこんな問い合わせがくるようになった。

「福島の避難所は、ペットと一緒に入れないんですか？」

いったん新潟に避難した後、福島に戻った人たちからだった。

福島県は、ペット同伴の専用避難所までは想定していなかった。

福島市の獣医師、河又淳は、市内のあづま総合運動公園を管理する県の外郭団体と交渉していた。

「ペット同伴者は避難所に入れずに車中生活を続けている。暑くなれば熱中症被害も心配だ。ペットを置けるスペースを設けてほしい」

管理者側は消極的だった。

「人間だってすし詰め状態なのに動物のスペースを作るなんて。避難者からクレームが出かねない」

何度も足を運び、5月半ばになってようやく「駐輪場の一部を使ってもいい」との許しが出た。

6月上旬、河又の依頼を受けたペット業者の支援で、「ペットビレッジ」が1週間の工期で完成した。犬用と猫用の2棟あり、水道や冷暖房も完備した充実した設備だ。犬猫約25匹が収容された。



南相馬市から猫と犬を連れて避難していた佐藤栄（さとうさかえ）（68）は、実に80日ぶりに床の上で寝ることができた。足の先まで血が巡るのを実感した。

車中や外階段で過ごし、避難所に入るのは物資をもらう時だけ。3月末から左手に力が入らず茶わんが滑り落ち、足取りもふらついた。エコノミークラス症候群の疑いと診断された。

犬と猫がそばにいてくれたおかげで寂しさを感じることはなかった。気休めにもなった。

「いなかったら、もっと老けこんでいたんじゃないかな」

だが、手のしびれは今でも残る。

佐藤は8月中旬に避難所を出た。ペットビレッジは、3カ月ほどで役割を終えた。

## 第5章 20キロ圏内うろつく犬

震災前、福島第一原発20キロ圏内には1万匹程度の犬がいたと福島県は試算する。飼い主に同伴されて避難できたのが約300匹。津波や地震で26%が命を落としたと仮定して、犬だけで7千匹規模、猫も同じくらい取り残されていると見込まれた。

大手メディアが30キロ圏外に退避する中、放浪する犬の姿をいち早く伝えたのは独立系のAPF通信社だった。愛護団体やボランティアが、犬猫の救助に乗り出すようになった。





4月上旬、20キロ圏は立ち入り禁止の警戒区域になると報じられた。県食品生活衛生課に苦情が殺到した。

「県はなぜ動物を助けないんだ」

「ボランティアが入れなくなる。何をやっているんだ」

県は当時、20キロ圏内の犬猫の保護はしていなかった。動物愛護担当で主任獣医技師の小野剛（おのたけし）（45）は受話器を手に、「行きたい気持ちは山々だが、安全も保証されておらず、作業できない」と繰り返した。時には「あんたの命より犬猫の方が大切だ」という怒声まで浴びせられた。早朝から夜中の11時台まで、電話は鳴りやまなかった。

苦情に押される格好で、4月28日から5月2日まで県職員が「調査保護」の名目で警戒区域に入るようになった。小野は日記に「やっと決まった」と記した。

初めて入った20キロ圏内は、「死の街」に見えた。取り込まれることのない洗濯物。食べかけのまま放置された食事。そして、犬たち。つながれたまま息絶えたもの。あばらを浮かせてうろつくもの。小野は涙で目の前が見えなくなった。

滞在は1日2時間まで。犬27匹と猫2匹を保護し、福島市飯野町の貸倉庫に収容した。県がシェルターとして急きょ契約を結んだものだ。

そこでは、犬の訓練士の穴戸健二（ししどけんじ）（39）が独りぼっちで犬猫の世話にあたっていた。保健所のボランティアだった穴戸は、体力と若さを理由に世話役として採用されていた。

シェルターは、物資も人手も足りなかった。中・大型犬が多いのに、ケージは小型犬用のものばかり。苦情を訴えているのか、どの犬もほえ続けている。1日1食、水やりも1回だけ。大小便にまみれた新聞紙を取り換えるので精いっぱい。散歩なんて到底できない。エアコンは壊れ、屋根からは雨漏りがしていた。

5月の連休を過ぎ、ボランティアも来なくなった。これからどうなるのか。60匹まで増えた犬猫を前に、穴戸は不安を募らせた。

## 第6章 こいつら心病んでる

2011年5月10日から、警戒区域への住民の一時帰宅が始まった。

取り残されたペットは、飼い主が自ら捕まえて連れ出せばいいと、県職員の小野剛らは考えた。自分たちが行っても犬は近づいてこず、猫は姿すら見せなかった。飼い主だったら捕まえやすいし、そのまま連れて帰ってもらえばよい。

だが、この案は国の原子力災害現地対策本部に否定された。物品の持ち出しはポリ袋1枚分だけで、動物の連れ出しは禁止するというのだ。

調整の結果、こうなった。飼い主が犬や猫を捕まえたら、自宅前につないでおく／後から県職員が回収して、必要に応じて除染をする／県のシェルターで預かり、飼い主には後日引き取りに来てもらう。

一時帰宅が始まると、予想通り、飼い主の手でたくさんの犬や猫が捕まった。それを小野たちが福島市飯野町のシェルターに運び込んだ。

世話役のボランティア、穴戸健二はパニックになった。運び込まれる犬猫は増え続け、6月上旬には犬146匹、猫47匹に。一時帰宅が始まる前の3倍だ。世話役は2人態勢になったものの、到底手が足りない。小型犬でも大型犬でも同じ量のエサをケージに放り込んだ。

衛生環境も十分ではなかった。長期の放浪による衰弱で、猫は風邪、犬はパルボウイルスに集団感染した。5月だけで5匹の犬が死んだ。

一方で、次々子どもが生まれた。だが、世話をできる状況ではない。子犬が、1匹ずつ減っていくことが何度かあった。よくよく注意してみると、脚だけが残されている。

母犬が、食べていた。

穴戸は、夢の中でも犬の鳴き声が響いた。もう限界だと県に改善を求めたが、手いっぱいなのか、対応してもらえなかった。

シェルターの環境は福島市の獣医師、河又淳の耳にも入っていた。

河又是県動物救護本部のメンバーになっていた。県獣医師会を通じてシェルターの視察を県に求めたが、所在地すら明かしてもらえない。

「どうもこの辺にあるらしい」

6月上旬、車で周辺をぐるぐると回り、シェルターを突き止めた。

入って、言葉を失った。

薄暗く、異臭が鼻をつく。犬たちは悲痛な鳴き声を上げ続けている。まるで、野生動物のようなその声は河又の心をえぐった。

「こいつら、心を病んでいる」

たまらなかった。その足で県庁に駆け込んだ。



## 第7章 「犬も人も救われた」

「こんなひどい状態で、どうするつもりなんですか」

福島県が管理するペットシェルターの劣悪ぶりに直面した獣医師の河又淳は、県食品生活衛生課長の大島正敏（おおしま まさとし）（61）と向き合った。当時、大島は県動物救護本部長をしていた。

大島は新たにシェルターを設けるつもりだと釈明した。県有地の草を刈って屋外にケージを並べる、と。屋外と聞いて、河又は怒った。

「夏を迎えるのに、野ざらしなんてあり得ない」

大島は「それなら場所を探してほしい」と返した。

河又は友人の獣医師、渡辺正道に連絡を取った。三春町の納屋で避難者の犬猫約40匹を預かっていた渡辺自身も、新たな開業先を求めて物件を探していたところだった。

4日後、河又の元に「三春町のつぶれたパチンコ店を押さえた」と、渡辺から連絡があった。

その1週間後、河又のつてで大手ペットショップ・ゴジマが獣医師とスタッフ計70人をシェルターに送った。「まずは犬をきれいにしよう」

犬舎を洗い、犬たちにシャンプーやトリミングをした。ふかふかの毛並みになった犬たちは久々の散歩を楽しんだ。故障していたエアコンを換え、湯も出るようになった。

犬舎の間に仕切り板を設け、隣の犬に尾をかみちぎられるといったトラブルを防げるようになった。山積みの物資も整理し、病気の犬の隔離スペースもつくった。



2日間で環境は大幅に改善した。肅々と、整然と進む様子に、開設時からのスタッフ、宍戸健二は、こみ上げる涙を抑えられなかった。

「犬も人も救われた」。ほっとする思いと、「もっと早くできなかったのか」との思いが交錯した。

ボランティアを入れれば状況は改善した。しかし県はそれを認めず、シェルターの場所さえ秘密にした。なぜそれほど閉鎖的だったのか。

大島の説明はこうだ。夜間は無人で、いたずらされる恐れがあった。警戒区域内の犬猫を収容したことが地域に知れば、放射能汚染を心配し反対運動が起きたかもしれない。

だが宍戸は思う。劣悪な状況を知られたくなかった、だから閉鎖的にせざるを得なかったのではないかと。県はシェルターの状況が表に出ることに神経をとがらせ、宍戸らに写真を撮ることも禁じていた。

コジマのスタッフが入って以降、シェルターは徐々にボランティアが増えていった。

## 第8章 それでもまた行った

2011年4月22日に原発の半径20キロ圏内が立ち入り禁止の警戒区域となると、違法を承知で動物の救出に入る人が相次いだ。

南相馬市小高区の塾講師、吉田美恵子（よしだみえこ）（63）もその一人だった。猫12匹と暮らしていたが、4匹がどうしても見つからない。独り身の吉田には大切な家族だ。

「家族を返して下さい」

プラカードを掲げ、市役所前に立った。すると、「うちもなんです」と飼い主が次々と声をかけてきた。





吉田はペットが残る約80軒のリストを作り、こっそりえさやりや捕獲に通った。放射能の恐れより小さな命への思いが勝った。バリケードはだんだん厳重になった。何度も警察に見つかり、始末書を書かされた。それでもまた行った。私は間違っていない。気持ちは揺るがなかった。

4月半ば、環境省はペットを救出する目的で民間人の20キロ圏内の立ち入りを認められないか、ひそかに検討していた。だが、問い合わせた内閣府のチームはにべもなかった。原発事故は収束せず、地域住民の立ち入りも認めない状況だったからだ。

次に考えたのは、警察や自衛隊にペットを救出してもらう策だった。

だが、これは要請にも至らなかった。同省動物愛護管理室の室長補佐・大倉弘二（おおくらこうじ）（53）は「行方不明者を捜索しているさなかにペットを救助することは、世間の理解を得られないと考えた」と明かす。

結局、一時帰宅で飼い主が捕らえたペットを回収し、県のシェルターで預かった。一時帰宅が一巡する8月末までに約460匹を保護した。

問題はシェルターからペットを引き取る飼い主が少ないことだった。仮設住宅がペット禁止だったり、県外に引越して戻れなかったり。多くの飼い主は、ペットと暮らせる環境を取り戻せていなかった。

必然的にシェルターは過密状態が続いた。県は、一般家庭に預かってもらうことを考えた。名乗り出た人は県外を中心に約40人にも上った。

ところが……。飼い主側の希望者はゼロだった。「県が預かってくれる方が安心」などと訴えた。

第2シェルターとして獣医師の渡辺正道が見つけた三春町の元パチンコ店は、改装工事が大幅に遅れていた。収容の受け皿がない中で、警戒区域をうろつく飼い主不明の犬猫にまで県は十分に対応できなかった。

吉田たちのようなボランティアについて、いま大倉は打ち明ける。

「正直ありがたかった」

## 第9章 猫の保護は後回し

1 回目の一時帰宅があった2011年の5～8月、福島県庁の主任獣医技師、小野剛は警戒区域に連日通っていた。

朝5時に起床して4トントラックで警戒区域へ。3～4時間かけて犬と猫を回収し、福島市内のシェルターまで運ぶ。世話をして県庁に戻るのは午後8時。事務作業を終えて帰宅すると午前0時を回っていた。

2人1組の4、5班態勢。多いときは20匹保護したが徐々に減り、8月になると1匹も回収できない日もあった。死体を見る機会も増えた。

犬小屋の傍らで死んでいた犬には心が痛んだ。リードは外され、どこへでも行けたはずなのに。

「待っていたんだ」

もっと早く動ければ。一緒に避難できる態勢を整えていたならば。

動物愛護業務の担当者として、小野は、責任を感じていた。

できることをやろう。放浪犬の捕獲や、表向き禁止されているエサやりもした。シェルターに一度は収容するのがルールだが、飼い主の強い要望があれば一時帰宅者の集合場所でこっそり直接手渡しもした。

そんな小野も後回しにしたことがあった。猫の捕獲だ。

自治体の職員が法的に権限を持つのは狂犬病予防法に基づく放浪犬の捕獲だけ。法的根拠のないことをどこまでやればいいのか。野良猫と見分けもつきにくく、猫用のワナもない。おのずと消極的になった。

だが、犬より猫の方が生命力も繁殖能力も高かった。猫は増え続け、後に県や国を悩ませることになる。

富岡町の獣医師、渡辺正道も一時この活動に加わった。当時はワナも使わず、近寄ってきたのを捕まえるだけだった。「何だか手ぬるいな」

窓口となっていた現地の環境省職員に直訴した。保護活動の実施計画には国が福島県の協力を得て行う、と記されていた。実際に作業しているのは県職員だが、仕切り役は環境省という複雑な構図だった。

渡辺はこう提案した。「土地勘のある地元の人間を使った方がいい。保護依頼のある場所を重点的に回るなど、方法を改めるべきだ」

うるさがられたのか、以後、活動への声かけは来なくなった。

環境省は活動に加わる獣医師を募り、150人余りのリストを作ったが、実際の参加は渡辺を含め十数人とどまった。一度も声をかけられなかった獣医師の方が多い。渡辺は「俺たちを本気で使う気持ちがあったのか」と振り返る。



## 第10章 官民連携は終わった

2011年秋、富岡町の渡辺正道は、自分の動物病院の入り口に張り紙をした。

「これ以上、私達の心にキズを付けないで下さい」

久しぶりに立ち寄ると、ガラス戸が割られ、室内に犬猫のエサがばらまかれていた。動物愛護を掲げたボランティアの仕業だと思った。



自分は原発事故の8日後に決死の思いで戻った。犬猫5匹は犠牲になったが16匹を助け出し、ここにはもう動物はいない。なのになぜ、こんなことをするのだろう。渡辺は持って行き場のない怒りを感じていた。

原発事故後、警戒区域では60を超える個人や団体がペットの保護活動をしていた。ペット検索サイトの管理人、福田章子（ふくだしょうこ）（43）の集計では、保護された犬猫は半年で実に1500匹以上。ペット保護の名目では警戒区域に入れないので、バリケードのない山道を抜けたり、架空の理由で市町村から立ち入り許可証を取ったりして入っていた。

こうしたボランティアの一部は、地域であつれきを生んでいた。

「どこに保護するかも告げずに、愛犬の首輪を切って連れ出した」

「敷地内にエサをばらまかれ、タヌキや牛に入れられ迷惑している」

苦情が県や市町村に寄せられた。無人の町には空き巣も横行し、ボランティアの犯行が疑われもした。市町村は許可証を出さなくなった。

一方で冬を前に、環境省には「ボランティアを活用しろ」「捕獲のペースを上げないと次々に凍死する」などの要望が相次いでいた。

これらの声を背景に、環境省が動く。政府の原子力災害現地対策本部の了解を取り、12月7日から27日まで、民間16団体にペット保護名目の立ち入りを初めて認めた。

条件は、捕まえた犬猫は団体が飼養管理する／ペット保護に不要な器具機材を持ち込まない／秩序を乱す行為を行わない、など。

成果はめざましかった。行政による保護が1日1、2匹にまで落ち込んでいたのに、期間中に犬34匹、猫298匹を捕獲した。

だが、立ち入りが認められたのはこのときだけだった。ある団体の活動を収めた動画がテレビに流れ、これが約束違反と見なされた。環境省動物愛護管理室の大倉弘二は「帰りたくても帰れない住民感情を思えば見過ごせなかった」と話す。

行政と民間の連携はこんな理由で終わった。ボランティアはこっそり入るしかなかった。

## 第11章 殺さなくたっていい

「牛たち、なにも殺さなくたっていいんだよ」

2011年5月、富岡町の獣医師、渡辺正道は何人もの畜産農家に電話をかけていた。同月12日、政府は警戒区域内の家畜について「所有者の同意を得た上で殺処分にする」と発表していた。

渡辺は、もともとは和牛の獣医師だ。父のあとを継ぎ、近隣では最も多い年間千頭以上を診てきた。

富岡町には県内に4カ所しかない家畜市場がある。1970年代には子牛の平均価格は東北一を誇り、1頭が100万円台で取引されることも珍しくなかった。

だが、原発で働く人が増えるにつれて牛を飼う人は減った。浜通りで唯一市場は残ったが、高齢化も加わり、年6回のセリは上場頭数のめどとされる200頭を割り込むこともしばしばとなった。平均価格も40万円台前半まで落ちた。

渡辺もペットの診療に比重を移しつつあったが、牛を診ることは特別な意味を持っていた。

「牛の獣医師」は、繁殖が仕事の柱だ。雌牛の妊娠期間は約10カ月。効率よく妊娠させるために、出産後2カ月以内に再び受精させる必要がある。2日で終わる発情のサインを見逃さずに人工授精を成功させるには、農家との連携が欠かせない。

エサの与え方や種付けする精子の選び方など、農家と二人三脚で取り組んだ。子牛が高値で売れば喜びを分かち合ってきた。「農家の財布の半分」は自分が預かってきたつもりだった。

農家は渡辺を信頼し、身内の話も打ち明けた。息子の将来、嫁とのいざこざ……。むしろカウンセリングが主な仕事かとも思いつつ、そうした人との絆が働く原動力となった。

お産となれば夜中でも呼び出される。旅行はおろか、娘の学校の行事にもろくに行けなかった。

原発事故で、警戒区域には3500頭ほどの牛が取り残された。立ち入り禁止になるまで、渡辺はなじみの牛舎へ何度もエサやりに通った。だが、到底足りるわけはなく、牛たちは死んでいった。

一方、町なかを牛がさまよい始めた。電気柵が停電で用をなさなくなったり、動物愛護のボランティアが牛舎を開放したりしたことで表に出た牛たちだ。

この牛たちはやがて殺されてしまう。渡辺は、殺処分の条件が「所有者の同意を得た上で」となっているところに目をつけた。





## 第12章 「ダメだ。白旗だ」

2011年5月以降、富岡町の獣医師、渡辺正道は、原発関係者や国会議員と一緒に警戒区域へたびたび入っていた。

牛舎ではたくさんの牛の死体を見た。腐臭が充満し、ウジがわき、ハエが飛ぶ。そんな光景を前にしながら、不思議と心は動かなかった。

死ねば、苦しみはそこで終わる。

むしろ心が痛んだのは、悠々と草をはみながら、これから殺処分されようとしている牛たちだった。

被曝（ひばく）したからといって殺されなければならない理由があるとは思えなかった。俺たちはじきに富岡へ戻る。親牛は無理でも、子牛ならいつか出荷できるかもしれない。そうやって復興していくんだ。復興のためにも牛を殺してはだめだ。

渡辺は知り合いの畜産農家に電話をかけ、時には農家の避難先に足を延ばし、「殺処分に同意しないで」と説いて回った。

富岡町の畜産農家、田代安明（たしろやすあき）（59）も渡辺の話す通りだと思った。

田代は福島第一原発で働きながら、妻と一緒に牛を育てていた。12頭の親牛に名前をつけ、毎日頭をさすってかわいがってきた。

「仕事の道具」ではあるが、愛情をかけて10年以上も育てる意味ではペットと同じだ。「殺せ」と国に命じられても、納得できなかった。

しかし、一時帰宅のバスの中で聞いてしまう。

「うちのみそ蔵、牛に随分やられちゃった」

「うちは植木がダメになったよ」

そもそもの原因を作ったのは原発事故だが、放れ牛が被害をまき散らしている現実には打ちのめされた。



その後、役場にも牛についての苦情が来ていることや、「畜産農家に賠償してもらおうか」との声もあるとうわさで聞いた。

「牛を殺すなという思いが、復興を妨げてしまうのか」

悩んだ末、田代は渡辺に電話をかけた。

「先生、もうダメだ。白旗だ」

田代は牛の改良に人一倍熱心で、その姿勢は仲間に刺激を与えていた。牛に真剣に向き合ってきた田代が出した結論が殺処分というなら、尊重するしかない。

7月29日。渡辺は日記帳に「白旗」と書き込んだ。

被曝した牛を殺さずに集め、体内の放射性物質を研究しようとする研究者や牧場関係者の動きもあった。だが、渡辺自身はそんな活動から遠ざかっていった。

## 第13章 花を供えて、わびた

2012年3月21日。畜産農家の田代安明の心模様とは裏腹に、富岡町には青空が広がっていた。行方が分かった4頭の牛の殺処分に立ち会う。義務ではないが、見届けなければならないと思った。牛は、田代が所有する運動場に集められた。よその牛も含め約20頭が防護服の男たちに囲まれていた。「うちの子だ」

1年ぶりの再会だが、4頭はすぐにわかった。近づいて頭をなでるといった気分にはなれなかった。少し離れたところから見守った。

牛たちに、防護服姿の獣医師が吹き矢で麻酔をうち込む。牛は少し痛がるようなしぐさをし、くぐもった声を出してひざから崩れる。そこへ筋弛緩（しかん）剤が手際よく注射される。

1頭の所要時間は数分ほど。牛たちはパニックになることもなく、淡々と、殺されていった。吹き矢が1本飛ぶたびに、田代は胸に突き刺さるような痛みを感じた。



埋葬場所は、自宅から数百メートル離れた自分の田んぼを選んだ。家から見えるところには埋めたくなかった。線香と花を供えて、わびた。

田代は、かつて東北一の和牛繁殖地だった双葉地区の再興を図りたいと考えていた。

上場する子牛の数が減り、買い受け人も減った双葉家畜市場は、落札の平均価格も下がっていた。

「双葉市場はどのみちつぶれる。県内の別の市場の方が、10万から20万円は高く売れるぞ」

地元を見放す動きが農家の間に公然と広がり、田代も誘われた。

若手の自分が地元を見捨てるわけにはいかない。何とかもり立てようと06年に始めたのが、若手農家のグループ「B・Eco（ベコ）ネット」だ。

毎年5月ごろ、町内の耕作放棄地に妊娠中の牛30頭近くを放牧する。1週間ごとに場所を変えながら7～8カ月間を過ごさせると、牛たちの毛並みは輝き、お産も軽くなる。土地の荒廃も防げると、いいことづくめで、県から表彰もされた。

震災1カ月前にも集まった。子どもの絵画展や新米の食べ比べなど、セリの日に合わせて市場でイベントをやろうと語り合った。

そうしたすべてが崩れ去った。

13年3月末、警戒区域の再編で田代の土地は居住制限区域になった。

帰還は早くて4年先。その時、牛を飼える大地に戻っているのか。自分にまだ気力が残っているのか。5カ月前に始めた除染の仕事の傍ら、田代は心を悩ませている。

## 第14章 犬猫の幸せって何だ

警戒区域の牛を生かす活動から遠ざかった獣医師の渡辺正道は、犬や猫の救護に力を注ぐことにした。

2011年10月、渡辺が見つけた三春町の元パチンコ店が、改装工事を終えて福島県動物救護本部の第2シェルターとして完成した。渡辺は管理獣医師に就いた。





貸倉庫だった福島市飯野町の第1シェルターとは大違いだった。ペットチェーンなどの支援を受け、約9千万円かけた設備は冷暖房完備で、ゆったりとした個室を犬は78室、猫は40室設けた。屋根付きの駐車場は犬の運動場となった。

だが、課題は山積していた。県は飼い主になかなか連絡を取ろうとしない一方で、連絡なしでワクチン接種や治療をすることは制止した。

「もしものことがあると、訴えられるかもしれないから」

そこへ、消防署が視察に来た。

「もちろん狂犬病予防注射は打っていますよね？」

「ええ、まあ」と言葉を濁した渡辺は、独断ですぐに注射を打った。

葉を一つ買うにも要望書を書いて発注は数日後になった。血液検査やX線撮影なんて到底できない。気がかりな症状が出ると、妻で獣医師の三智子（みちこ）（54）が働く須賀川市の動物病院まで車に乗せて運んだ。

「野戦病院以下だ」

長期にわたる放浪生活のせいで、犬も猫も食への欲求が強かった。犬は新聞紙や毛布を、猫はトイレの砂を食べてしまうケースが続出した。猫は、カエルを食べてしのいできたのだろう。両生類に見られる寄生虫がしばしば見つかった。

飼い主たちは迎えにくるのはおろか、面会にもなかなか来なかった。所有権は放さないで、新たな飼い主に譲渡もできない。シェルターは無料ペットホテルと化していた。

自らも避難生活が続ける渡辺は、当初「それでも構わない。いくらでも預かる」と思っていた。だが、次第に疑問を感じるようになった。

「人間の1年は、犬猫には4、5年。ずっとここに押し込められていることが犬猫にとって幸せなのか」

半面、飼い主が迎えに来たら来たで、複雑な心境になった。元の家には戻れない、覚悟を決めた飼い主たちは県外に新居を構えていた。

門出を祝う気持ちはある。ペットにとっても飼い主と住むのが一番いい。しかし自分はペットへの援助を通じて地元を復興させたいと思っていた。その小さな希望が、手をすり抜けていくようだった。

## 第15章 これ野良猫だよね？

新たにできた第2シェルターだけでは犬猫を収容しきれないため、貸倉庫の第1シェルターは残った。

「第1」スタッフの穴戸健二は、犬の扱いに手を焼いていた。長期の放浪の末に保護された犬たちは人間への敵対心や恐怖心を強めていた。

2012年2月に来た飼い主不明の「オニー」との出会いは強烈だった。あまりに暴れるため麻酔を打たれて担ぎ込まれたとき、もうろうとしながらも歯ざしりして威嚇した。鬼の形相からオニーと命名した。



だが、オニーは1週間で穴戸に慣れた。掃除の際、素直にケージから出てくると「いい子だね」と思い切りほめた。かつての飼い犬は、人間を信頼する心を失っていなかった。

12年3月、環境省は関係団体に委託し、警戒区域内に残されたペットをワナで集中捕獲した。

これまで、飼い主が判明している犬猫を「預かる」ことを優先し、飼い主不明のペットの「捕獲」は遅れがちだった。特に猫は後回しになった。11年末に民間ボランティアを活用して約330匹を捕獲したが、犬は100匹、猫は数百匹は取り残されていると見込まれた。春の繁殖期を前に捕獲を進める必要があった。

序盤に100匹近くの猫を捕らえた。犬猫がゆったり過ごせるように設計された第2シェルターだが、60センチ四方のケージを何段も積み重ねて猫を収容せざるを得なかった。

19日まで捕獲の日程は既に組んである。ワナを減らし、明らかに震災後生まれの猫がワナにかかると、その場で逃がすこともあった。

その後、集中捕獲は半年間行われなかった。新たなシェルターの完成が遅れたことが大きかった。

環境省は、第2シェルターの脇に簡素なシェルターを5月中に建てるつもりだった。だが、福島県から基礎部分の弱さを指摘され、工期はずれ込んだ。7月下旬、4棟のプレハブ小屋が完成したが、8月はお盆を理由に捕獲は見送った。

迎えた9月。約1カ月で犬1匹、猫131匹が捕まった。まったく人に慣れない猫が多く収容された。第2シェルターの管理獣医師、渡辺正道が面倒を見ることになった。

「これって、野良猫だよな？」

ペットとして飼われていた猫の2世、3世と思われた。もはや避難者のペットとはいえないが、捕獲の遅れに伴う落とし子ではある。

どこまで対応すればいいのか。ケージの隅でおびえる猫たちを前に、渡辺は途方に暮れた。

## 第16章 人を知らない猫たち

2012年12月、三春町のシェルターには過去最多の270匹の猫が収容されていた。うち100匹超は震災後生まれとみられた。

人間を知らず、おびえて暴れる猫にはエサをやるのも一苦勞だった。スタッフはマジックハンドを使って食器をケージから出し入れた。

被災者のペットでも野良猫でも、同じ命に変わりはない。だが、シェルターの管理獣医師、渡辺正道はむなしさを感じていた。

12年4月に郡山市で妻の三智子と動物病院を再開した渡辺の元には、ペットを連れて避難した人たちの悲痛な声が届いていた。

飯舘村やいわき市は仮設住宅でのペット飼育を禁止したが、多くの市町村はペットを飼う人を一つの棟に集めるなどの工夫をして、飼育を認めていた。

トラブルは少なくなかった。狭くて薄い壁の、仮暮らしの日々。犬の鳴き声の苦情が寄せられ、「もう殺すしかないのかな」と思い詰める飼い主がいた。鳴きやませるためにしきりにおやつを与え、犬を肥満にしてしまった飼い主もいた。

浪江町から避難した独り暮らしの女性は、18歳になる老犬を車で飼い続けていた。避難先の借り上げアパートがペット不可だったからだ。車のエンジンをつけっ放しにして24時間エアコンを利かせ、13年2月に犬が死ぬまで世話をした。

避難した後も苦勞している飼い主たちがまだ大勢いる。渡辺は、こんな人たちのペットをシェルターで預かりたいと思った。一時的に預かるだけでも飼い主はリフレッシュできるだろう。生活のパートナーであるペットが人に生きづらさを与えている現実を何とかしたかった。

とはいえ保護した犬猫でぎゅうぎゅう詰めシェルターに、ペットを預かる余裕はない。

何もできない現状に、渡辺は歯がゆさを募らせた。

警戒区域でペットの救出が始まったとき、震災からすでに50日ほどが経過していた。つながれていたり、室内にいたりしたペットが命を落とすには十分すぎる時間だった。

夏の炎天下では犬猫は姿を見せなくなり、保護は難しくなった。やがて猫は次々と繁殖して数を増し、いつまでたっても保護が終わらない悪循環に陥っていく。

序盤の数カ月がその後を決めた。もう少し迅速な対応ができていれば……。いま、渡辺はしみじみとそう振り返る。



## 第17章 いつ終わらせるのか

いつまで続けたらいいのか。終わりの見えない保護活動に、ボランティアにも疲弊が広がっている。

南相馬市小高区で取り残された犬猫へエサやりを続けてきた吉田美恵子は、2012年末から野良猫を捕獲して不妊手術をし、再びすみかに戻す「TNR活動」を始めた。

TNRとは《trap=捕獲、neuter=不妊去勢、release=解放》の頭文字。不妊去勢手術を受けさせ、数を減らす活動だ。

エサを与えるだけでは猫はどんどん繁殖してしまう。無責任だとも感じるようになった。だが、手術代は1匹数万円。カンパを募りながら月10匹のペースで取り組むしかない。

この3月末から4月にかけて、立ち入り禁止だった原発の半径20キロ圏が再編された。日中の立ち入りが認められる「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」が広がった一方、放射線量の高い「帰還困難区域」はバリケード封鎖され、ボランティアの活動は困難になった。

一方、12年計約460匹の犬猫を集中捕獲した環境省は、13年度の方針をまだ決めていない。被災動物に向けた予算は12年度より大幅に減った3千万円。多くがシェルターの運営費で、12年度並みの捕獲はできそうもない。とりあえず立ち入り可能区域の保護は、飼い主やボランティアに任せる方向で考えている。

4月4日、渡辺正道が管理獣医師を務める福島県動物救護本部のシェルターに、1台のワゴン車が寄贈された。獣医師でつくる団体からの寄付で、手術台が内蔵されている。

これで移動しながらどこでもTNRを進められる。帰還困難区域も含め、残された犬猫に自分一人でも向き合い続けると渡辺は決意した。

一方で考えるのは、このシェルターをいつ終わらせるのか、ということだ。環境は初めの頃より随分改善された。だが、運営費は月に約500万円。義援金を使ったらだら続けるのも好ましくない。





当初手のつけられなかった猫たちは幸い、スタッフのおかげでだいぶなついた。譲渡も進み、この3カ月で50匹の猫がもらわれていった。

「水が飲みたくて仕方ないのに、随分長く待たされて、おにぎりが出てくる感じ」

これまでの歩みを渡辺はそう表現する。必要な支援をなかなか受けられず、時間がたってから予想を超えるものが出てくる、という意味だ。それでもようやく「終わり」が見えてきたと感じている。

## 第18章 教えてくれたこと

2013年2月末、福島市飯野町の第1シェルターは、第2シェルターと統合して閉鎖された。当初独りぼっちで犬猫の世話にあたった穴戸健二も任を解かれ、日常に戻った。

犬の訓練士の穴戸は、子犬を繁殖させるブリーダーもしていた。売れるかどうかが価値の基準で、障害や病気を患う子犬は「不要な命」だった。生命より生活を優先した自分の過ちを、人間に翻弄（ほんろう）されたシェルターの犬たちが教えてくれた。「いらない命なんてない」。犬との向き合い方を考え直すつもりだ。

福島県の職員として警戒区域へ犬猫の保護に55回通った小野剛は、2012年3月に退職し、妻の実家のある愛知県に引っ越した。双子の娘の健康被害を心配してのことだ。

災害時にペットをどうするか。それを考える立場だったが、立案は後回しだった。今回の災害では県獣医師会、環境省、民間団体との連携が進まなかった。県庁内もまもらなかった。いらいながらも「どうせ無理」と自分の殻にこもった。

「システムや組織自体は仕事をしない。人と人が結びついて動かすしかない」と実感した。引っ越し先では再び地方公務員の職を得ることができた。機会があれば、今回の教訓を伝えようと考えている。

環境省動物愛護管理室の大倉弘二は、4月中にペットに関する災害時の指針を作ろうと奮闘している。明記したいのは、（1）飼い主は避難にペットを同行する（2）行政は避難所や仮設住宅でペットの受け入れ態勢を整える——の二つ。福島での対応を、「不十分だし、遅かった」と大倉は悔やむ。その反省を盛り込む。

富岡町の獣医師、渡辺正道は、郡山市で仮住まいを続ける。無邪気な愛犬が生きる希望となった。連れ出せなかったら家族の心はバラバラになっていたはずだ。飼い主に伝えたい。ワクチン接種や不妊去勢手術が災害時の備えとなること。そして何より「連れて避難して」。人なしでは生きていけない存在なのだから。

県動物救護本部が保護した犬猫は約千匹。助からなかった命の方がずっと多いとみられている。シェルターで250匹の犬猫と向き合いながら、渡辺は救えなかった命を心に刻み続けている。



# プロメテウスの罠〔27〕 子犬は生きていた！ 残された動物たち

著 者 朝日新聞（机美鈴）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年4月25日 WEB新書版発行

2013年11月30日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-053-3

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年4月25日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。